

俺は冴えないサラリーマン

温泉でエロすぎる4Pを見たっ！！！！

小さな街も都市化され、随分と大きくなった。

大手企業のショッピングモールが軒を並べ、若者たちも都市部から多く流動してきた。

今では昔は栄えていた商店街の銭湯の数々は潰れ、新しい温泉がいくつも出来ている。

古きが絶たれ、新しきが隆盛する。まさしく栄枯盛衰を象徴するような田舎都市である。

ひとりの髪の手をしゃくちにして青い薄髭の生えた小汚い男がいた。

名を良助（りょうすけ）という。

温泉へ行くのが趣味の良助。

冴えないサラリーマンの彼は浮かない顔をしていた。

ひたすら汗水たらして働くだけの日々。会社ではこき使われ、家では一人飯。

せめてもの救いのテレビゲームも最近飽きてくる始末。

せめてもの鬱憤を晴らそうと、この日は温泉へやってきた。

小さなアパートの横にある月極（つきぎめ）駐車場に通勤に使う軽自動車があったが、この日はタクシーを利用することにした。

温泉へ到着。真昼間である。

靴をコインロッカーへ入れ、温泉内へ。

こんな抑圧された時代にあっても、温泉の雰囲気は暖かい。

入口に薪の暖炉があり、まだ肌寒さ残る3月の施設内を温めている。

やっぱりいいものだな

少し背伸びをした後、良助は温泉の中へ。

脱衣所で衣服を脱ぎ温泉の引き戸を引くと、

“混浴温泉”

との壁紙が。

数ヶ所ある街中の温泉。この温泉は立地が良助の自宅から少し遠く、ここへ来るのは初めてだった彼は驚いた。

ただ、混浴になっているのは露天風呂だけで、それぞれ男風呂女風呂には分かれているようだった。

「へえ。そうだったのか」

良助は高揚した。

混浴と言えば当然女性の裸、生まれたままの姿がおがめるわけで。

女性には全くと言っていいほど縁のない日々。

せめて女の裸が見れるぞ。

良助の胸は弾んでいた。

もちろん混浴とは言っても女性たちが皆、例えばストリップ劇場のように露
わに裸を見せてくれるわけではない。

．．．．どれだけガードが堅いのかは分からないが．．．．．．．．。

実際、露天風呂へ息を弾ませ行ったその数分後、良助は男風呂に戻ってきた。

まるで毛虫を見るような嫌そうな眼つきで良助は女性たちに見られたのであ
る。

女性たちのガードはあまりに固かった。

落胆はしたが・・・・・・・・・・。

まあ考えてみれば当然か、と自分を慰める。

女性たちの目的はあくまで入浴。そもそも古くから、混浴温泉の目的は老若男女に関係なく入浴を楽しもうという言わば“裸のお付き合い”。

女性たちすべてが喜んで裸を見せてくれる、そんな美味しい話はないのだ。

結局俺は家に帰ってオナニーするくらいしかないのか、と少し良助はため息を漏らした。

温泉は空いていて、偶然にも良助が戻ってきた男風呂には男性の姿はいなか

った。

すると、入り口の引き戸を開き一人の青年が入ってきた。

まだ顔にはあどけなさが残っている。

良助は彼を一目見て驚いた。

青年の股間には、2リットルのペットボトルほどのイチモツがついていたのである。

毛を全て剃っているようで、その大きさがくっきりと分かった。

片手で掴んでも指はおそらく交差しない。まるで馬など大きめの哺乳類につ

いていそうなその大きさの物体が、まるで華奢なその青年の股間に不自然極まりなくついて揺れているのだ。いかにも重そうにぶらんぶらんしている。

良助の興味は女性にしかないのだが、なんだかおもしろそうだと思った。

どうせ暇だから、とバレないように良助はその青年の後をつけることにした。

既にシャワーを浴びてサウナにもひとくぐりした後だった。

こんなのも温泉を楽しむ一環だ。

などと青年を不自然にならぬよう追ってみる。

ぶらんぶらん。ぶにゆぶにゆ。

ぶらんぶらんっ!!!

————— 体験版はここまでです。 —————